「豊かな刈り入れを願って」
マタイによる福音書 13 章 24-30 節

ある人が麦の種を畑に蒔きました。すると人々が眠っている間に敵が来て、毒麦を蒔いて行きました。実る頃になって、毒麦に気づいたしもべたちは抜き集めようとします。ところが主人は言うのです。「いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、『まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい』と、刈り取る者に言いつけよう」。これがイエスさまの語られたたとえ話です。

私たちはこのたとえ話をどの立場で聞いているのでしょうか。ある人は「毒麦」のところに身を置いて聞かかもしれません。その人たちは、自分も火で焼かれてしまうのではないかと不安を抱くかもしれません。またある人は「良い麦」のところに身を置いてこう考えるかもしれません。“私の周りでもあの人とこの人は毒麦だ。そのせいで私は被害を被っているんだ。”けれども、そんなふうな目で人々を見ているとしたら、どうでしょうか。あるいは、そう思うだけでは済まない人たちもいます。「では行って抜き集めておきましょうか」。しもべたちのところに身を置いたら、そうなります。害を及ぼす悪いものは一刻も早く抜き取ってしまわなくてはならない。私たちも、心のどこかでそう思うことはないのでしょうか。“あの人々の態度や言動は問題だ。何とかしなければいけない”って、その人を批判し裁いてしまったり、追い出してしまったりすることはないでしょうか。

そのようにどこに身を置くかで、このたとえ話の中に見えるものは違ってきます。しかし、このたとえ話の中心は、良い麦でも、毒麦でも、毒麦を蒔いた敵でも、毒麦を刈り取る計画をするしもべたちでもありません。このたとえ話の中心は「主人」です。そして、その主人は「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい」と言うのです。なぜでしょう。「毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない」。これが理由です。合理的に考えるなら、毒麦を抜く時に少々良い麦を抜いてしまったとしても、最終的に収穫が上がるなら少々の犠牲はやむを得ない、そう考える方が常識的でしょう。

ところが、この主人は異常なほどに一本一本の麦にこだわるのです。それほどまでに、私たち「一人ひとり」に、神さまは深い慈しみの御心を向けられるのです。神さまにとって、どうでもいい存在など一つもないのです。抜かれてしまってもしょうがないものなど一つもないのです。ですから、じっくりと忍耐をもって、時が来るまで待たれるのです。

とはいえ、この主人の言葉は、それだけでは「毒麦」にとって救いにはならないでしょう。いくら神さまが忍耐をもって待たれたとしても、火に焼かれる時を先送りされただけに過ぎないからです。神さまは、良い麦と毒麦を一緒くたにはされません。良い麦と毒麦は区別されます。それは私たちを不安にさせる恐ろしい話でもあります。

しかし、このたとえ話はイエス・キリストが語られたたとえ話なのです。キリストによって罪の赦しがもたらされているところで語られているたとえ話なのです。そうであるならば、私たちがこのたとえから聞きとるべきことは、自分が良い麦か毒麦か、救われる者か滅びる者か、という不安ではありません。そうではなく、神さまが、この私を守り、生かし、救いにあずからせようと深い慈しみをもって見守ってくださっている。このことこそ、私たちが

聞き取るべき最も大切なことなのです。

私たちは皆、神さまによって命を与えられ、この世に生まれさせていただいた者です。私たちは、神さまが蒔いてくださった良い麦なのです。しかし、その私たちが造り主なる神さまを忘れ、自分が主人になって自己本位に生きようとするとき、私たちは毒麦になってしまっているのです。けれども、その私たちの罪を神さまは赦し、キリストの贖いによって救い出してくださったのです。そのようにして、神さまは、私たちが悔い改めて神さまのもとに立ち帰り、もとの良い麦となることを深い慈しみによって待っておられるのです。

もし神さまという主人が、しもべたちの提案通りに「今すぐ毒麦を抜き集めてしまいなさい」と言われる御方だったなら、私たちはとうの昔に抜き集められて、滅ぼされていたに違いありません。ただ神さまは、終わりの日まで待たれるのです。私たちがイエス・キリストを通して与えられた恵みを受け取り、罪の赦しにあずかって、良い麦として生き始め、良い麦として生き続け、たとえ失敗したとしても何度でもやり直し、良い麦として刈り入れられることを神さまは望んでおられるのです。